日本大学大学院総合社会情報研究科紀要　No. 4, 14-25 (2003)

「美」から「真」への円環

– ヘスターからディムズデールへ –

深堀　真理子
日本大学大学院総合社会情報研究科

Circle Joining Beauty to Truth

– from Hester to Dimmesdale –

FUKAHORI Mariko
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Nathaniel Hawthorne begins *The Scarlet Letter* with a beautiful woman, Hester Prynne, but is continually attracted by Arthur Dimmesdale, who remembers the truth of Scripture. This brings the end to the moral sentence "Be true!" that lies in "Conclusion." *The Scarlet Letter*'s long preface titled "The Custom-House" shows Hawthorne's dualistic way of thinking and makes Hester and Dimmesdale form a circle joining beauty to truth.

序論

ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne, 1804-64）は、メダルの表側だけでなく裏側にも関心を寄せていたといわれるように、視点を常にその対極にあるものにも向けていた。これはホーソーンの「二元性」といわれるもので、彼の心的態度を探る重要な要素である。[1]『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）についてヘンリー･ジェイムズ（Henry James, 1843-1916）は、彼の著書『ホーソーン』（*Hawthorne*, 1879）の中で「彼（ホーソーン）をひきつけたものは、これから先の長い歳月における彼らの精神的状態を考えることであった。」[2] と述べている。彼らとは登場人物のヘスター・プリン（Hester Prynne）とアーサー・ディムズデール（Arthur Dimmesdale）のことである。しかし、「物語は二義的な意味において、ヘスター・プリンの物語なのである。」[3] と続くとおり、ヘスターが絶望、恥辱、孤独の中で緋文字 A を胸につけ罪を背負いながら娘パール（Pearl）を育て、たくましく生きていく姿をみても彼女の存在や美しさが際立つ物語である。一般的にヘスターを主人公とする所以はここにあるといえる。

一方、牧師のディムズデールについては、「彼（ディムズデール）の罪の相手の女が白日下にさらされて、つつましくあがないの苦しみを受けているのを見ながら、純潔な聖職からおのれが堕落した秘密を、信者の尊敬にふさわしい外見にひた隠しに隠す若いピュリタンの牧師 ――不名誉が慰めとして、さらし台が安らぎとして訪れるであろう、いやがうえにもみじめで哀れなこの罪人」[4] と書かれているようにその対極にある否定された存在として表されている。

すでに罪を告白し償いの生活を送っているヘスターに対して、告白できずに影で断食や勤行をおこなってはいるが、共同体の人々の前ではあくまでも善良な牧師という立場を守り続けたディムズデールは、ヘスターの対極にいる人物である。このような二人の精神的状態の結末は、ホーソーンの胸の中、つまり「二元性」を特徴とする彼の心的態度を探ることによって見えてくるのである。

ホーソーンの心的態度を探るには、『緋文字』につけられた序文「税関」[5]（The Custom-House）を軽視することはできない。「税関」は、『緋文字』本文の物語を導く序文としての役割だけでなく、ホーソーンが自伝と述べていることから、彼自身の伝記的

要素や思考にいたるまでが描かれていると考えられる。序文と本文との関係を通して、ホーソーンの心的態度を、さらにはヘスターとディムズデールの精神的状態の結末を考察しながら、『緋文字』が「美」から「真」への円環を導くものであることを明らかにする。

Ⅰ．序文「税関」の重要性

『緋文字』には、全文の約五分の一にもおよぶ序文がつけられている。[6] この序文には、「税関」というタイトルがつけられ、ホーソーンが輸入品検査官として 1846 年から 1849 年までの三年間勤めたセイラムの税関での個人的な経験が描かれている。特に、ホーソーンが仕事を共にした人々の描写が数多くある。ホーソーンにとっては同僚に対する正確な印象を陽気に述べたまでであったが、政権交代によって輸入品検査官としての職を追放されたこともあり、新聞数紙に新政権ホイッグ党（Whig Party）批判との批評を掲載され、セイラムの住民までも巻き込む前代未聞の騒ぎを引き起こしている。

『緋文字』初版出版直後の 1850 年 3 月 25 日付けのセイラム・レジスター紙（*Salem Register*）には、“ The Scarlet Letter Prefix ”と題し、当時発行されていた新聞各紙に掲載された「税関」に対する書評をまとめた記事が発表されている。その中で、『緋文字』の出版社は序文を出版前に削除すべきであったと書かれるなど、「税関」がいかに不評だったかを物語っている。さらには、ホーソーンの繊細な性格に至るまでが酷評されている。[7] このように個人的な経験ばかりが描かれているために、日本でも「税関」は『緋文字』の一部でありながら訳本からも省かれるなど本文ほどには重要視されることがない。[8]

しかし、本文との直接的な関係が無いように思われる内容をあえて序文として発表した作者ホーソーンの意図は決して見過ごすことはできない。しかも、このように物議をかもしたにもかかわらず、第二版が発行される際につけられた「第二版への序文」（Preface to the Second Edition）においても“ The author is constrained, therefore, to republish his introductory sketch without the change of a word. ”(2)[9] と述べられているとおり、一語たりとも訂正することなく「税関」を再度公表するとしたホーソーンの確固たる思いは無視できないのである。

「税関」はホーソーンが思うままに書いた随筆とみなされる向きがあるが、ホーソーンは文頭で「税関」を自伝と語っている。しかもその自伝を語る衝動にとらえられたというのである。また、著者として世に出した書物を理解してくれる人に対しては、深い内心の秘密を告白するとも書かれている。このように、ホーソーンをとらえた衝動によって書かれた「税関」を通して、彼の心の奥深くに秘められた思いを探ることは可能であるといえる。

１．「税関」の特質

「税関」の中でホーソーンが語っているものとは、彼が三年間勤めた税関の人々のこと、奇妙で怠惰で喜びに欠ける愛着のために宿命的に戻ってきた生まれ故郷セイラムのこと、歴史に名を残した先祖のこと、ロマンス作家としての執着心、緋文字 A を見つけた経緯などであり、それを役人生活のスケッチとして描いている。

ホーソーンは「税関」の特質として、「第二版への序文」の中において、偽りのない本物の陽気さと同僚の印象を伝える筆致の正確さを挙げている。

> But it appears to him, that the only remarkable features of the sketch are its frank and genuine good-humor, and the general accuracy with which he has conveyed his sincere impressions of the characters therein described. (1)

しかし、「税関」全文を通して必ずしも本物の陽気さを感じる部分ばかりではないため、これは「税関」全文に対する特質というより、むしろ初版発行後の騒動に対するホーソーンの弁明と解釈し、役人時代の同僚に関する記述部分に対しての特質と考える方が妥当であろう。

ホーソーンは「税関」の中で、生まれ故郷であるセイラムのことを“ I must be content to call affection. ”(8)と述べ、特別な思いを抱いている。ホーソーンの

一族は、代々セイラムで生涯を過ごしながら、その土地に深く根を張って生きてきたために、ホーソーンの肉体はその土地と共鳴するという。“ sensuous sympathy of dust for dust ”(9)が、ホーソーンのセイラムに感じる愛着であると述べている。ところが、ホーソーンの特別な思い入れは感覚的な部分だけではない。精神的な側面もある。幼心に焼きついたおぼろげな先祖の姿が四十歳を過ぎたホーソーンの心にいまだにつきまとうのである。

ホーソーンの先祖とは、厳格なピューリタンであり、クエーカー教徒の迫害や魔女の殉難によって歴史に名を残すほどの人物たちであった。この有名な先祖たちの行為について、ホーソーンは、生前の残虐行為を悔い、天の許しを請うているのか、別世界で重い罪の贖いに呻吟しているのかと冷ややかなまなざしを送っている。さらに、先祖たちの行為が一族に呪いを招いたと憶測しており、その呪いが消えてなくなることを祈っているのである。しかし、ホーソーンは先祖たちのしがらみを断ち切ることができず、たとえ作家である自分を軽蔑されようとも“ strong traits of their nature have intertwined themselves with mine ”(10)であると切っても切れない絆で結ばれていることを断言している。

このようにホーソーンが感覚的にも精神的にも感じる特別な思いは、ホーソーンとセイラム、また、ホーソーンと先祖を結びつけている要因でもある。セイラムは“ the inevitable centre of the universe ”(12)とまでいえるほど、ホーソーンが宿命的に引き寄せられる土地であり、ホーソーン自身にも先祖たち同様ピューリタン的な部分が息衝いていることを証明しているといえる。

ホーソーンが頑迷固陋で宗教と法律を同一視するようなピューリタン精神をそのまま受け継いでいるように捉えられがちであるが、彼が厳格なピューリタンであった先祖に精神的に束縛されていたことは明らかである。ホーソーンはピューリタン社会に精通してはいたが、ロマンス作家としてそれを容認するか否定するかの決断を下すにあたり彼の心の葛藤はかなりのものであったと考えられる。

ところで、税関の二階で緋文字Ａが発見されたとの記述は、この序文と本文を結びつける唯一の箇所である。この部分によって本文の信憑性を保証し、真実性を主張するとホーソーンは述べているが、読者の関心をひくため以外の何ものでもないように思われる。緋文字Ａを発見した経緯よりもむしろ、発見したことによってホーソーンが引きずり込まれたロマンス作家としての苦悩に注意を払うべきである。

ホーソーンにとって税関の雰囲気は、想像力や感受性の繊細な収穫には適していなかったため、彼の想像力は曇った鏡と化してしまっていた。“ for a man who felt it to be the best definition of happiness to live throughout the whole range of his faculties and sensibilities! ”(40)と述べられているように、能力と感受性を発揮できずに生きることは、ホーソーンにとって幸福でいられるはずもなく、彼のロマンス作家としての定義を満たすことすらもできない当時の現状は、苦痛であったに違いないのである。“ A man of thought, fancy, and sensibility ”(26)のホーソーンが、周囲からそのように思われることなく、“ a man of affairs ”(26)としてのみの活躍しかできなかったことは、彼がどんなにか不本意なことに思っていたかを容易に察することができる。

このように「税関」には、セイラムや先祖との関係、ロマンス作家としての苦悩について描かれ、それらを通して数々のホーソーンが抱いていた思いをみることができる。これこそ、「税関」の特質であるといえよう。

２．「税関」の完成

「税関」が書かれたのは、1850 年 1 月 15 日以前のことであろうといわれている。つまり、『緋文字』本文が完成する以前に書かれたというのである。

1849 年の冬、11 月か 12 月のことであるが、ボストンにある出版社のフィールズ（James Thomas Fields, 1817-81）はホーソーンに何か出版することを勧めるために訪ねている。当時、ホーソーンは税関を追放され、失意の状態にあったとされている。そのため、彼はフィールズの誘いに対しても気力が無いと返答しているのである。ところがホーソーンは、この日フィールズが帰る間際になって『緋文字』の原型を手渡している。これを読んだフィールズは熱

狂して、翌日再度ホーソーンを訪ね『緋文字』の出版手続きをとる話をし、翌 1850 年この『緋文字』が世に出たのである。[10]

そこでこの出版に際して、1850 年 1 月 15 日のことであるが、最後の三章を書き残して、ホーソーンは『緋文字』の原稿をフィールズに送っている。[11] そして 2 月初めにはすべてを書き上げている。これは、2 月 3 日にすべてを書き上げた旨の手紙を翌 4 日に友人のホレイショ・ブリッジ（Horatio Bridge, 1806-93）に送っていることからわかる。手紙には、“ There is an introduction to this book ―giving a sketch of the Custom-House, with an imaginative touch here and there ―which perhaps may be more widely attractive than the main narrative. ”[12]と書かれ、「税関」についても言及されている。つまり、全編が書き上げられた時には、もう既に「税関」はできあがっていたことを証明しているのである。

また、「税関」に“ some six months ago ”(8)は税関に勤めていた人物であったとあることから、税関を辞めた 6 月の半年後、つまり、12 月か 1 月ということが判明するのである。そして、残りの三章は興奮状態で書かれていたといわれているので、その前に、つまり 21 章が書き上げられた以前に「税関」は書かれたということがいえるのである。[13]

このように『緋文字』を書いている最中に、A の布切れを発見する個所以外は、一見何の関係も無いように思われるホーソーン自身のことを述べた「税関」を書かなければならなかったのかは大きな疑問である。

Ⅱ．ヘスター的なる「美」の行方

「税関」には緋文字 A を見つけた経緯とそれを胸につけていたヘスター・プリンについてのみの簡単な説明があるだけであるが、『緋文字』は二義的な意味において、ヘスター・プリンの物語とヘンリー・ジェイムズが述べているように、本文はヘスターにひかれるように物語が進んでいる。本文の随所にヘスターの美しさや力強さ、女性としての魅力や献身的に善行をつくす心優しさなどが描き出され、否応無しに彼女へと目が向くのである。

ところが、本文の途中からヘスターの美しさが消え失せてしまう。ホーソーンの興味が消えてしまったかのようである。ここにホーソーンの「美」に対する考え方が表れていると考えられる。

美しいヘスターと彼女の「美」を求めて『緋文字』は物語が進むはずであった。ヘスター・プリンの物語であれば、当然のことである。しかし、『緋文字』においてホーソーンがひかれていたのは、ヘスター・プリンだけではなく、彼女と牧師ディムズデールの精神的状態だったのである。ヘスターの「美」だけではなく、彼女に求めた「美」の結果にホーソーンがひかれた精神的状態へと向かう彼の心の変化がみえるはずである。

１．美しいヘスター

２章「広場」においてヘスターが最初に現れた場面では、監獄から出てきた直後にもかかわらず、彼女の美しさが魅力的に表現されている。

> The young woman was tall, with a figure of perfect elegance, on a large scale. She had dark and abundant hair, so glossy that it threw off the sunshine with a gleam, and a face which, besides being beautiful from regularity of feature and richness of complexion, had the impressiveness belonging to a marked brow and deep black eyes. She was lady-like, too, after the manner of the feminine gentility of those days; characterized by a certain state and dignity, rather than by the delicate, evanescent, and indescribable grace, which is now recognized as its indication. (II, 53)

罪人として現れたヘスターの容姿は想像を絶するほど美しい。いかにホーソーンが美しい女性を描こうとしていたかを容易に察することができる。また、ピューリタンたちの中にカトリック教徒がいたならば、罪人として処刑台に立つパールを抱いたヘスターの姿は、“ an object to remind him of the image of Divine Maternity ” (II, 56)であると描かれている。本来ならば天と地ほどの開きがあり、名前を出すこと

すらもはばかられるような決してたとえられるべきではない聖母マリア像にまでたとえられるとは、いかにヘスターが罪を忘れさせるほどの美しさを持つ人物であったかを物語っているといえる。ピューリタンではなく、カトリック教徒としているところにも、ホーソーンが描きたかった美しい女性像を見ることができる。

これだけではない。18 章「あふれる日光」（A Flood of Sunshine）では、森の小川のほとりでディムズデールと語らう時のヘスターはこの上なく美しい。

> By another impulse, she took off the formal cap that confined her hair; and down it fell upon her shoulders, dark and rich, with at once a shadow and a light in its abundance, and imparting the charm of softness to her features. There played around her mouth, and beamed out of her eyes, a radiant and tender smile, that seemed gushing from the very heart of womanhood. A crimson flush was glowing on her cheek, that had been long so pale. Her sex, her youth, and the whole richness of her beauty, came back from what men call the irrevocable past, and clustered themselves, with her maiden hope, and a happiness before unknown, within the magic circle of this hour. (XVIII, 202)

普段は声を掛け合うことも目を合わせることすらもできないヘスターとディムズデールが、一緒に新たな土地へと逃避する計画を立てたことにより、すべてのしがらみから解き放たれた一瞬である。緋文字 A がヘスターの胸から剥ぎ取られ、あふれんばかりの日光の下で、将来の夢をふくらませるヘスターの姿は、罪とも恥辱とも関係が無い、女性としての幸せで満たされている。七年という苦悩の歳月の末にやっとつかんだ幸せを実感しているようである。もっとも美しく輝ける時であったろう。

この 18 章の時点で逃避を容認し、そこに美しいヘスターを重ね合わせるホーソーンの「美」に対する姿勢をうかがい知ることができるのである。

２．「美」の否定

ヘスターは類まれなる美しさを持つ女性であることが強調されている。ホーソーンが表現でき得る限りの美しい女性として描かれたためと考えられる。また、罪を犯した人間でもその罪を公の場で告白し、その罪を贖いさえすれば、聖母マリアにでも慈善修道女にでもたとえられてしかるべきという意見を、ホーソーンが持っていたのではないかとの印象を受けるのも否定できない。その上、ヘスターを地位が弱い女性の権利を拡張させるための代表者でもあるかのように、好意的に美しく仕立て上げられてもいるのである。

ところが、本文では、このようにヘスターを美しく魅力的に描いているにもかかわらず、「税関」では、篤志看護婦として善行に励み天使としてあがめられていたヘスターに対して“ I should imagine, was looked upon by others as an intruder and a nuisance. ”（32）と、ホーソーンは客観的で否定的な意見を述べている。

『緋文字』本文での美しさに対する序文での否定は、まるで、ヘスター的なる「美」への思いをすべて断ち切ってしまったかのように思われるのである。つまり、「税関」が書かれる前までの時点では、美しいヘスターが本文中随所に現れており、ホーソーンは「美」を追求しているといえるが、「税関」を書いた時には、ホーソーンはヘスターに「美」を求めるのを止めてしまったのではないかと考えられる。

「税関」は最後の三章を残した時点よりも前に書かれている。確かに 21 章「ニューイングランドの祝日」（The New England Holiday）以降は、ヘスターの「美」には触れられていない。19 章「小川のほとりの子供」（The Child at the Brook-Side）までは、恥辱や孤独の中にいるはずのヘスターに強さや美しさがみられ、彼女に光が当たることもしばしばであった。ところが、21 章「ニューイングランドの祝日」以降は、ヘスターの悲痛な思いだけがページを埋めているのである。ホーソーンのヘスター的なる「美」への思いは既に捨て去られてしまったのだろう。

これは、22 章「行列」（The Procession）でのディムズデールの様相と同じではないだろうか。ヘスターに目もくれず行列して通り過ぎていくディムズデ

ールの姿は、ヘスターが許せないと思うほど別人にみえたのであるから、ディムズデールはもう既にヘスターに対する思いを断ち切っていると考えられるのである。ホーソーンとディムズデールの興味深い共通点である。

このようにホーソーンが追求した「美」は、「税関」とともに消え去ったといえる。そして、ディムズデールのヘスターに対する思いも同時に消え去ってしまったのである。

Ⅲ．迷路の牧師の決断

『緋文字』の 20 章「迷路の牧師」（The Minister in a Maze）はそのタイトルを見る限りにおいては、牧師ディムズデールの心がいまだ揺れ動き迷っている印象を受ける。しかし不思議なことに、実際ここではそのような混沌とした世界にいるディムズデールを見ることはできない。伝道師のエリオット（Apostle Eliot）に会いに出かけた帰りにヘスターと森で密会し、町に戻った牧師ディムズデールはそれまでと同じ牧師ではない。ディムズデールは、彼に挨拶する人々たちに“I am not the man for whom you take me!” (XX, 217) といっても構わないと思えたのである。

森から出てきたディムズデールの内なる人間は、思考と感情の領域において大変革が起こっていたのである。森でヘスターに出会う前のディムズデールは、小枝を杖にして、前かがみに歩き、ひどくやつれ、おとろえた表情には失意の色すら表れた状況であった。ところが、森を出て町へと戻るディムズデールは、ぬかるみを飛び越え、からみつく下生えを押しのけ、坂をよじ登り、窪地に飛び込むといった驚くほどの疲れをしらぬ力を発揮して足早に進んで行ったのである。とても「迷路の牧師」などとはいえない。ディムズデールは何らかの決断を下し、彼の心はもう既に決まってすっきりしているとしかいいようがないほどの変貌ぶりをみせている。それゆえ、出かける前に書きかけられていた祝賀説教の原稿は完全に捨て去られ、新しい決断とともに新たな説教の原稿を書いたのである。

１．ディムズデールの変貌

森から出た直後のディムズデールは、外見的な変化だけではなく、内面的にも途方もなく凶暴で邪悪なことをしでかしかねない衝動にかられたり、人間の魂の不滅性を否定したり、神をあなどる言葉を連発して気晴らしをしたくなったりと、謹厳な牧師からは想像できない欲望に襲われている。そしてディムズデールは悪人や邪悪な霊魂たちの世界に共感をおぼえ、仲間意識をいだいてしまっている。つまり、18 章「あふれる日光」においてヘスターとパールとともに新しい土地へと逃避する計画を決めたことだけに罪の意識を感じたのではなく、ディムズデールは牧師としての顔の下に隠していた本来罪人としてあるべき姿を無意識のうちに強烈に感じ始めていたと考えられる。

ディムズデールは、住み慣れた自分の部屋に戻り、あたりを眺めて“That self was gone! ” (XX, 223)と自覚するのである。森から別人となって戻ってきた証拠といってよいだろう。

また、ディムズデールの部屋にかかっている聖書に由来するダビデ、バト・シェバ、ナタンの三人が描かれているゴブラン織りの壁掛けは、罪を隠すディムズデールにとって、自分自身、ヘスター、チリングワース（Roger Chillingworth）を連想させ、苦痛の種ともなりかねないものである。ところが、森から戻ったディムズデールには “ the tapestried comfort of the walls ”（XX, 222）と、ゴブラン織りの掛かった壁が心なごむものとなっている。つまり、預言者ナタンの諫めにより、ダビデは心の底から悔い改め、自らの罪を認め、神に赦しを請い、それまで以上に強大な王となるのであるが、ディムズデールはこのように神の赦しを請うた結果をこのタペストリーに見ることができるようになったと考えられる。[14] それゆえにこのタペストリーに “ comfort ” を感じたと考えられる。この部分をみても、ディムズデールの心の変化を表しているといえるのである。

さらには、ディムズデールは家に戻った直後に、彼の部屋に入ってきたチリングワースを見て、悪魔を見るのと同じ思いを抱いている。そして、チリングワースが自分で調合した薬をディムズデールに勧

めるが、ディムズデールは“Nay, I think not so” (XX, 223)ときっぱり断っている。チリングワースとは同じ家に住み、彼を受け入れていたディムズデールであったが、そのチリングワースを完全に跳ね除けてしまっているのである。これは、単にチリングワースがヘスターの夫であるとわかったからではなく、ディムズデールがそれまでの自分に対して決別し、新しい決断を下したことを表しているのである。

２．チリングワースの効用

ヘンリー･ジェイムズは「物語は、大部分、愛人と夫の間で進行する」[15] とも述べている。愛人ディムズデールと夫チリングワースである。チリングワースについては「おのれが受けた不義の償いをえようとして、悪魔のごとく巧みな計画を立て、その加害者と一緒になり、共に暮し、彼を食いものにし、相手の隠れた病に手をかすとか、その苦しみに共感をよせるとか装いながら、真実を思いがけなく知った喜びに浮かれ、悪意ある詐術によって、それを刺激する、年長の鋭く思慮深い人物」[16] と描かれている。

チリングワースは、やっとたどり着いた新天地で、再び明るい家庭の団欒を囲むために自分のことを待っていると思っていたヘスターが処刑台にいるのを見つけ、“ A writhing horror twisted itself across his features, like a snake gliding swiftly over them, and making one little pause, with all its wreathed intervolutions in open sight. ”（61）とまるで蛇のように、鋭い洞察力をみせ恐怖の戦慄の表情を浮かべている。この瞬間から、チリングワースの知性的な容貌が、悪魔の容貌へと変わっていくのである。そして彼は、この新たな土地で、新たな目標を立てざるを得えなくなり、“ a new purpose; dark, it is true, if not guilty, but of force enough to engage the full strength of his faculties ”（IX, 119）とあるように、全能力を発揮して追及する目的を持つようになったのであった。

チリングワースの容貌の変化は、ディムズデールと同居するようになってから顕著に現れている。実験で使う火種は地獄からもたらされたと人々の噂にまでのぼるようになっていった。チリングワースの存在が悪魔と結びつくようになってから、彼自身も自分を悪魔だと認識している。ヘスターとの会話の中で、“ I have already told thee what I am!　A fiend! ”（XIV, 173）と自分のことを悪魔と呼んでもいるのである。

チリングワースの目的は、ヘスターの罪の相手を探ることであった。彼を扱った９章は “ The Leech ” というのが原題であるが、日本語訳では、「医者」となっている。“ leech ” とは、もともと「ヒル」という動物にしっかりと食いついて血を吸う虫という意味を持つ。悪い血を吸い出すことによって病気を治療するといわれたことから医者とも解釈されるのであるが、まさしくチリングワースは、ディムズデールの悪を引き出すためにしつこくつきまとう医者としての姿をしたヒルに違いない。10 章「医者と患者」（The Leech and His Patient)でチリングワースがディムズデールの自己欺瞞に対して“ deceive themselves ”（X, 133）を繰り返す攻撃はヒルの姿である。ところが、相手の罪を公に暴くことや、罪人として死を持って償いをさせようなどとはしていないのである。そこがこのチリングワースの恐ろしいところである。

14 章「ヘスターと医者」（Hester and the Physician）のタイトルで明らかなように、ヘスターに対しては同じ医者でも “ physician ” としての医者でしかないことからも、ディムズデールにしつこくつきまとい罪を探ろうとするチリングワースは、ディムズデールの変化を理解する一つの要素となり得るのである。ディムズデールがチリングワースの医者としての姿の下に隠された本当の姿、つまり悪魔の姿を見つけ出すことができるか、あるいはそのまま悪魔に支配されてしまうのか。ディムズデールの心の変化を探るには、チリングワースの存在が欠かせないのである。ここにチリングワースの効用があるといえる。

チリングワースは、ディムズデールの心の中を覗きながら彼を苦しめ続けていく。治療という名のもとにディムズデールの罪を公に暴くことをせずにつきまとう行為は、悪魔そのものである。その悪鬼に満ちたチリングワースを森から戻ったディムズデールははっきりと悪魔と認識するのであるが､それは、自分の罪を罪として悟ったからに他ならない。罪を悟ったディムズデールには、チリングワースの治療

はもう必要ないのである。すべてを悟り、新たな決断を下したディムズデールは既に迷路から脱出しているといってよいのである。

このように、既に迷路から出ている牧師ディムズデールに対して「迷路の牧師」という不可解なタイトルがつけられたのは、ホーソーンの自叙伝的序文「税関」に起因しているに違いないのである。

Ⅳ．ホーソーンとディムズデール

20 章「迷路の牧師」は牧師ディムズデールが既に迷路から脱出しているにもかかわらず「迷路の牧師」というタイトルがつけられ、21 章以降の急展開を導いている。この不可解で疑問が残る 20 章に対して、ほぼ同じ時期に書かれた「税関」は、なぜこの時期でなければならなかったのかという疑問が出てくる。ホーソーンについて述べられた「税関」とディムズデールについて述べられた 20 章「迷路の牧師」の両者には疑問が多いという共通点がある。

そして、ホーソーンが衝動にかられて書いた「税関」に対して、一心不乱に祝賀説教の原稿を書くディムズデールにも同じように共通点を見出すことができるのである。

１．祝賀説教原稿の実体

20 章「迷路の牧師」の最後でディムズデールが書いたのは説教であるが、実はホーソーンが「税関」を書いていたのではないかと考えられる。つまり、祝賀説教の原稿の実体が「税関」だということである。なぜならば、ここで「税関」を書くことによって、21 章以降の『緋文字』の展開を裏付けることになったと思われるからである。

21 章「ニューイングランドの祝日」以降のディムズデールの変貌ぶりには驚きを隠せない。18 章「あふれる日光」でヘスター、パールとともに新しい土地へと逃避する計画を決めたディムズデールであるにもかかわらず、22 章「行列」では、ヘスターでさえも“ She hardly knew him now! ”(XXII, 239)とそれまでに知っていたディムズデールとは別人のように思えてしまうのである。それだけではない、“ she could scarcely forgive him ”(XXII, 240)と彼女は裏切りに対する怒りのようなものすら感じるのである。

これは、森から戻ったディムズデールが自ら新たな決断を下したことによるもの以外のなにものでもない。ヘスターの怒りをかうほどまでの変貌ぶりは、その新たな決断が確固としたものであったからに違いないのである。

ディムズデールの確固たる決断は、ホーソーンが一見何の関係も無いように思われる「税関」を発表した時の確固たる思いと非常に似たものがある。つまり、20 章「迷路の牧師」で書かれた祝賀説教の原稿の実体が「税関」であったとするならば、書きかけの祝賀説教の原稿を火に投げ入れ、新たな説教を書いたディムズデール、霊感が天下ったのではないかと思ったディムズデールはホーソーン自身であるといってもよいのではないだろうか。そして、それをまた証拠付けるのが「税関」だといえるのである。

２．自己欺瞞の二人

「税関」にはホーソーンの三年間の役人生活が描かれているが、この中で、緋文字 A を発見した箇所以外にはヘスターを連想できるようなホーソーンがひかれるほどの美しさを持つものは見当たらない。しかし、ディムズデール的なホーソーンを見出すことはできるのである。

ディムズデールといえば、犯した罪を牧師という顔の下に隠し、その偽善者的な姿に苦しみ続けるのであるが、それは 11 章「心の内側」（The Interior of a Heart）に自己欺瞞の様子がみられ、彼自身が真実を愛し、虚偽を恨んだゆえの苦悩と心の葛藤が明らかにされている。

> The minister well knew—subtle, but remorseful hypocrite that he was! —the light in which his vague confession would be viewed. He had striven to put a cheat upon himself by making the avowal of a guilty conscience, but had gained only one other sin, and a self-acknowledged shame, without the momentary relief of being self-deceived. He had spoken the very truth, and transformed it into the veriest

falsehood. And yet, by the constitution of his nature, he loved the truth, and loathed the lie, as few men ever did. Therefore, above all things else, he loathed his miserable self! (XI, 144)

このような自己欺瞞の姿はホーソーンにもあてはまるところがある。ホーソーンはロマンス作家として名声を得ることに対して、強い執着を見せている。しかし、実際の彼は、家族の生活を支えるためにという理由で、ポウク大統領(James Knox Polk, 1795-1849)から与えられたセイラム税関での輸入品検査官としての職に就き、高給を得ている。自分で自分を欺いている証拠である。しかし、ここでの収入は､年俸 1200 ドルという当時としては破格であり、一軒の家が買えるほどの金額であった。[17] このような金額を手にすることになれば、たとえホーソーンはロマンス作家となることを望んでいたとしても、これだけの収入を簡単に捨てることはできなかったであろう。ホーソーンはロマン主義者的な心情を持ちながらも、実際に取る行動はあくまでも現実的である。夢の向こうの真実は決して見過ごすこともなければ踏み外すこともない現実的な人物である。それでも、ロマンス作家としての思いを断ち切ることはできず､心の奥底では苦悩し続けていたのである。その苦悩の様子は「税関」にみることができる。

"The little power you might once have possessed over the tribe of unrealities is gone! You have bartered it for a pittance of the public gold. Go, then, and earn your wages!" In short, the almost torpid creatures of my own fancy twitted me with imbecility, and not without fair occasion. (34-35)

ロマンス作家になりえないホーソーンに対して、彼の空想の産物が愚か者となじるというかと思えば、"I had ceased to be a writer of tolerably poor tales and essays, and had become a tolerably good Surveyor of the Customs."(38)との自己正当性を求める姿は、ホーソーンの自己欺瞞に他ならないのである。

このようにホーソーンとディムズデールは、同じように自分を欺き続け、苦悩していたのである。

３．同じ部屋に住む二人

ホーソーンとディムズデールの共通点は他にもある。それは、部屋である。

「税関」にみられるホーソーンの部屋には、"the chairs, with each its separate individuality; the centre-table, sustaining a work-basket, a volume or two, and an extinguished lamp; the sofa; the book-case; the picture on the wall"(35)が見られる。一方、ディムズデールが書きかけの祝賀説教の原稿を焼き捨て、新たな説教を書き直した部屋にも"its books, its windows, its fireplace, and the tapestried comfort of the walls"(XX, 222)が見られる。

このように、この二つの部屋もかなり類似しているといえる。ディムズデールはこの部屋において、霊感が天下ったと思うほど思考と感情が激流のようにあふれでてくるものを熱狂的な慌しさでもって、つまり、恍惚として新たな説教を書いたのである。

…he forthwith began another, which he wrote with such an impulsive flow of thought and emotion, that he fancied himself inspired…However, leaving that mystery to solve itself, or go unsolved for ever, he drove his task onward, with earnest haste and ecstasy. (XX, 225)

これと同じく、ホーソーンも「第二版への序文」において､「税関」は、彼の能力を最大限に発揮した以上のものを持って、つまり恍惚となって書いたと証明している。

The sketch might, perhaps, have been wholly omitted, without loss to the public, or detriment to the book; but, having undertaken to write it, he conceives that it could not have been done in a better or a kindlier spirit, nor, so far as his abilities availed, with a livelier effect of truth. (1-2)

このような共通点から考えられることは、ホーソーンとディムズデールは同じ部屋に住んでいるということである。これは何を意味するかといえば、ホ

ーソーンは『緋文字』のディムズデールに自分の姿を映し出していたということである。つまりディムズデールはホーソーン自身だということである。そして、恍惚になって書いたものとは、ホーソーンの「税関」だったといえるのである。

20 章「迷路の牧師」は、ディムズデールが迷路にいたのではなく、ホーソーンが苦悩の迷路に足を踏み入れていたといえるのである。「税関」の中のホーソーンが迷路の中にいたとすれば、20 章の「迷路の牧師」という不可解なタイトルは、ホーソーンのことを考えれば納得できる。21 章以降の急展開も「税関」を通して理解できるはずである。「税関」がなぜ必要であったのかも「税関」が 20 章の終わりになぜ書かれなければならなかったのかも理由はここにあるのである。

Ⅴ．ディムズデール的なる「真」を求めて

軽快な筆致に隠れてしまっているが、ホーソーンは「税関」において、自分自身の心の葛藤を描き出している。批判しつつも切り捨てることができない先祖とそこから受け継がれるピューリタン性、ロマンス作家として活躍したいと願いつつも実行に移せないホーソーンの自己欺瞞の姿は、まさしく彼が迷路にいる様子を浮かび上がらせている。その中で、ホーソーンがディムズデールのように下した決断こそが、ヘンリー・ジェイムズがいっているホーソーンがひきつけられたヘスター･プリンとアーサー･ディムズデールの精神的状態を考えた結果の『緋文字』を生みだすことであったのである。

１．ロマンス

ホーソーンにとってロマンスとは、月の光の中で、普段見慣れたものの裏に潜む不思議なことを夢見て、それに真実らしい姿を与えることなのである。想像力が発揮される月光が射し込む彼の部屋は、いつしか現実の世界とおとぎの世界との中間に位置する中立地帯となり、暖炉の暖かい光と月光の冷たい精神性がまじりあい、空想がさまざまな姿を生み出すことになるのである。ロマンス作家として、ホーソーンは雪人形を人間の男女に変えるように、空想が生み出すさまざまな姿に、人間の心と感受性のやさしさを伝達することを望んでいたのである。

> This warmer light mingles itself with the cold spirituality of the moonbeams, and communicates, as it were, a heart and sensibilities of human tenderness to the forms which fancy summons up.　It converts them from snow-images into men and women.　(36)

ホーソーンは自分の部屋で雪人形を眺めながら、ヘスター・プリンとアーサー・ディムズデールという人間の男女を生み出し、人間の心と感受性のやさしさを伝達しようと試みたのである。1 章「獄舎の門」の冒頭にあるように、“ sad-colored ”(I, 47)や“ gray ” (I, 47)の服を着て、鉄鋲を打った強固な木製の扉に同化したような暗い印象を与える頑迷固陋で宗教と法律を同一視する厳格な人々の中で、人間の美しさや心の温かさ、そして感受性の豊かさや優しさを与える人物を描きたかったのである。だからこそ、ヘスターが最初に登場した場面では、罪人であるにもかかわらず、ホーソーンが想像し得る最高に美しい女性像を描き出し、作品中随所にヘスターの美しさをちりばめていたのである。

罪人としてあるべき姿を忘れさせるようなヘスターの美しさや活躍ぶりや共同体の人々の賞賛は、現実ではまずあり得ない。しかし、ヘスター的なる「美」を徹底的に描き出すことは、ホーソーンが求めるロマンスこそが成し得る業なのである。

２．ホーソーンの二元性

ヘスター的なる「美」を追い求めて描き始めた『緋文字』であったが、ホーソーンの心の内は葛藤し続けたのである。結局、常にメダルの裏側をみつめるホーソーンの「二元性」といわれる心的態度が「美」を追い求めることだけに満足しなかったのである。また、ピューリタン精神を受け継いだホーソーンは聖書から背くことに対して納得し得なかったはずである。「美」を追い求めれば追い求めるほど見えてくる「美」の裏側に潜む「真」に対して目を背けるこ

とができなくなっていたと考えられるのである。つまり、ヘスター的なる「美」の対極にあるディムズデール的な「真」を求めたということである。

20 章「迷路の牧師」においてみられるように、かつてのディムズデールは牧師として、自分の部屋で書を読み、ものを書き、断食と徹夜の勤行を行い、祈り、苦悩に耐えてきた。しかし、森から戻ってきたディムズデールはそのようなやつれた人物ではなく、チリングワースを跳ね除けるほどの強さを持っていたのであるが、その時彼は“ with one hand on the Hebrew Scriptures ” (XX, 223)であった。ディムズデールが迷路から脱出した際に下した決断とは、聖書に立ち返るということだったといえるのである。罪を悔い改め、畏怖の念を持って神に向き合い、神の恵を信じて受け取ることなしでは、罪は赦されないという聖書の真理をディムズデールは悟ったのである。それゆえに、牧師の顔の下に隠していた本来の姿である罪人としての自分に気づき、神の前に跪くことを選んだのである。

そして、ホーソーンは「税関」で「美」と「真」について、美は現実的な状況との接触により壊れていき、普通の人々のなかに潜む真実で不滅な価値は断固として探求されるべきであったと振り返っている。彼は「美」を追い求めることをやめ、「真」を追求することにしたのである。

> It was a folly, with the materiality of this daily life pressing so intrusively upon me, to attempt to fling myself back into another age; or to insist on creating the semblance of a world out of airy matter, when, at every moment, the impalpable beauty of my soap-bubble was broken by the rude contact of some actual circumstance. The wiser effort would have been, to diffuse thought and imagination through the opaque substance of to-day, and thus to make it a bright transparency; to spiritualize the burden that began to weigh so heavily; to seek, resolutely, the true and indestructible value that lay hidden in the petty and wearisome incidents, and ordinary characters, with which I was now conversant. The fault was mine. (37)

死の間際のディムズデールは、ヘスターとパールとともに処刑台に上がり罪を告白する。いまだディムズデールと一緒になることを夢見るヘスターを振り切り、掟を破った罪のことだけを考えるようにといいながら息を引き取るのである。「美」を象徴するヘスターに対して「真実だけを見つめて、謙虚に生きよ」との聖書に立ち返った「真」なるメッセージを残したのである。

> “Hush, Hester, hush!” said he, with tremulous solemnity. “The law we broke! ─the sin here so awfully revealed! ─let these alone be in thy thoughts! I fear! I fear! It may be, that, when we forgot our God, ─when we violated our reverence each for the other’s soul,─it was thenceforth vain to hope that we could meet hereafter, in an everlasting and pure reunion. God knows; and He is merciful! He hath proved his mercy, most of all, in my afflictions…His will be done! Farewell!” (XXIII, 256-57)

このディムズデールの最後のことばを受け、ホーソーンが“Be true! Be true! Be true! Show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!” (XXIV, 260)との教訓を書き残している。結局はディムズデール的な「真」を選ぶことがホーソーンの「真」だったのである。

結論

『緋文字』は、ホーソーンの「二元性」ともいわれる心的態度の表れであり、「美」を通して「真」を描き出している。メダルの裏側を見るように常にその対極を見ていたホーソーンは、ヘスターを通してディムズデールを見ていたといえるのである。それゆえにホーソーンがひきつけられていたヘスターとディムズデールの精神的状態は “ Be true! ” という「真」に帰結し、『緋文字』は閉じられるのである。

心は「美」を求めロマンスを追ってはいるが、行動は冷静であくまでも現実的であるゆえに、ヘスターからディムズデール、つまり「美」から「真」へ導かれることに対して苦悩したことは極めてホーソ

ーン的なのである。ホーソーン独自のロマンスを理解するためには、序文「税関」が必要不可欠だったのである。

『緋文字』の序文「税関」は、単なる本文の解説ではなく、ホーソーンがどういう状態において『緋文字』を書いたかという彼の心の内を読者に知らせるために必要とされたのであり、それによってホーソーンが描いたロマンスとしての『緋文字』が「美」から「真」への円環を浮き彫りにする作品であったことを証明しているのである。

注

[1] ヘンリー・ジェイムズ著、小山敏三郎訳著『ホーソーン研究』増補２刷（東京、南雲堂、1978 年）、201-02 頁参照。
[2] ジェイムズ著、小山訳著、116 頁参照。
[3] ジェイムズ著、小山訳著、116 頁参照。
[4] ジェイムズ著、小山訳著、116-17 頁参照。
[5] テキストの邦訳は、八木敏雄訳『完訳緋文字』（東京、岩波書店、1992 年）を使用。
[6] 1850 年発行の初版本では、全文 267 ページ中、序文「税関」が 54 ページである。Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, The Centenary Edition, vol.1 (Columbus: Ohio State UP, 1962), p.xxiii 参照。
[7] John L. Idol, Jr. and Buford Jones eds., *Nathaniel Hawthorne: the contemporary reviews*(New York: Cambridge UP, 1994), pp.119-21.
[8] 鈴木重吉訳『緋文字』（東京、新潮社、1957 年）。
[9] テキストは、Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, The Centenary Edition, vol.1 (Columbus: Ohio State UP, 1962)を使用。引用は( )内にローマ数字は章をアラビア数字はページを示す。以下同様。
[10] ジェイムズ著、小山訳著、112 頁参照。
[11] John C. Gerber ed., *Twentieth Century Interpretations of The Scarlet Letter* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1968), p.6 参照。
[12] J. Donald Crowley ed., *Hawthorne: the critical heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1970), p.151.
[13] Gerber, p.6 参照。
[14] 新改訳聖書刊行会訳『聖書』新改訳（東京、日本聖書刊行会、1970 年）、「サムエル記Ⅱ」11-12 章参照。
[15] ジェイムズ著、小山訳著、116 頁参照。
[16] ジェイムズ著、小山訳著、117 頁参照。
[17] 八木敏雄訳『完訳緋文字』（東京、岩波書店、1992 年）、387 頁参照。

参考書目

テキスト

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, The Centenary Edition, vol.1. Columbus: Ohio State UP, 1962.

参考文献

Crowley, J. Donald, ed. *Hawthorne: the critical heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1970.

Gerber, John C., ed. *Twentieth Century Interpretations of The Scarlet Letter.* Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1968.

Idol, John L., Jr. and Buford Jones, eds. *Nathaniel Hawthorne: the contemporary reviews*. New York: Cambridge UP, 1994.

James, Henry. *Hawthorne*. Foreword. Dan McCall. Ithaca, NY: Cornell UP, 1997.

原川恭一編　『アメリカ文学の冒険 ―空間の想像力―』　東京、彩流社、1998 年。

ヘンリー・ジェイムズ著　小山敏三郎訳著　『ホーソーン研究』　増補２刷　東京、南雲堂、1978 年。

楢崎健　「『緋文字』研究：ディムズデール擁護の試み」　『東海大学紀要，文学部』第 71 輯（1999 年）、13-29。

ナサニエル・ホーソーン著　鈴木重吉訳　『緋文字』　東京、新潮社、1957 年。

ナサニエル・ホーソーン著　八木敏雄訳　『完訳緋文字』、東京、岩波書店、1992 年。

斉藤忠利編　『緋文字の断層』　東京、開文社出版、2001 年。

新改訳聖書刊行会訳　『聖書』　新改訳　東京、日本聖書刊行会、1970 年。

矢作三蔵　『アメリカ・ルネッサンスのペシミズム ―ホーソーン，メルヴィル研究』　東京、開文社出版、1996 年。

(Received:May 29,2003)

(Issued in internet Edition:July 07,2003)